

## 第9回2022年の『ユリシーズ』 スティーヴンズの読書会 (2020年12月6日)

### Plot and Summary: Ep. 9: Scylla and Charybdis

\*\*\*

午後2時。『フリーマンズ・ジャーナル』の男たちと酒を飲んだ後で（「新聞仲間でわいわい；U-Y 9.339）、スティーヴンはキルデア通りにある「国立図書館」（写真上）の一室で、シェイクスピアと『ハムレット』について自説を語る。それを聞くのは、図書館長リスター（写真下）、図書館員で作家のジョン・エグリントン、“AE”の筆名で知られるジョージ・ラッセル、（ヘインズに対応していたため、少し遅れて入って来た）副館長のリチャード・ベストである。ただしリスターは何度も業務のために従者から呼び出しを受けて席を外し（そのうちの一人が「フリーマンの人」（U-Y 9.341）＝ブルームである）、ラッセルは農業新聞『ホームステッド』の事務所に行くため早々に中座し（U-Y 9.327）、「幕間」（*Entr'acte*）を挟んで（酒場で待ちぼうけを食らっていた）バック・マリガンが加わるため（U-Y 9.337）、スティーヴンのシェイクスピア論を終始聞いていたのはエグリントンただ一人である。

スティーヴンは、シェイクスピアの「家庭生活を詮索する」ことで（U-Y 9.323）、そのロマン派主義的あるいはイデア論的な天才性を剥ぎ取らんと目論み、『ハムレット』において劇作家は王子ではなく、先王に同一化すると解釈する。すなわち王妃ガートルードは、「ライ麦畑」で8歳「年下の恋人を寝転ばす恥知らずなストラトフォードの田舎女」（U-Y 9.327）、アン・ハサウェイであり、詩人の「三人の弟」、「ギルバート、エドモンド、リチャード」のうち、後者2人は他の作品で篡奪者として描かれていることから（「ろくでもない傭」のリチャードは「後家のアンに言い寄る『リチャード3世』として）（U-Y 9.358-59）、王位を奪われ、妻を寝取られたハムレット先王、その亡霊こそがシェイクスピアであるのだという。

エグリントンはスティーヴンの説を妄想と切り捨てながら、「きみは自分の説を信じているのかい？」と問うと、「スティーヴンは即座に」「いえ」と言う（U-Y 9.362）。多くの謎に満ちた『ハムレット』と同様に、彼のシェイクスピア論にも無数の謎、もとい「発見の入り口」に通ずる過ちがある（U-Y 9.325）。しかし『ユリシーズ』の読者にとって確かなのは、「寝取られ夫（cuckold）」としてのシェイクスピアという説が、それを唱える者とその友人が図書館の出口から外へ出ようとするとき、この「二人の間を通り抜けて行き、頭を下げて、会釈する」「一人の男」あるいは「黒い背中」を持つ（U-Y 9.369）、もう一人別の「寝取られ男」を暗に指差すこと、彼こそがスキュレとカリュブデイスの難所を突破する古代ギリシャの英雄「オデュッセウス」であるということだ。



1. 国立図書館の正門（小林, 2006年撮影）。
2. “National Library of Ireland,” @NLireland, Twitter, Mar 17, 2020, <https://twitter.com/NLIreland/status/1239586537005813765>